

第1回 自然資本のマネジメントに関する研究会 議事概要

日時：令和4年7月27日（水）14：00～18：00

場所：ウェブ会議形式による開催

出席者：小田切委員（座長）、神井委員、香坂委員、勢一委員、瀬田委員、瀧委員、橋本委員、平井委員、村上委員、菊田委員、寺田委員、瀧川委員、石井委員、荒木委員、熊谷委員、井上委員、松本委員、中澤委員、後藤オブザーバー

第1回研究会においては、冒頭、参加者から簡単に自己紹介を行った後、自然資本のマネジメントに関して、様々な論点、意見があること、その背景には様々な立場があることなどの認識を参加者間で共有するため、ワールド・カフェ方式に準じた手法で意見交換を行なった。

具体的な意見交換の手法としては、4つのブレイクアウトルームを設定し、以下の3つのテーマについて、テーマが変わるごとにブレイクアウトルームの構成員を入れ替える形で、順番に3ラウンド意見交換を行ない、その後、全体で意見交換からの気づきを共有した。

1. 自分にとっての自然資本、自然資本マネジメントのあるべき姿
2. あるべき姿を実現するための多様な主体の参画
3. あるべき姿を実現するためのデジタル化（DX）

テーマごとの主な意見交換の概要は、以下の通り。

1. 自分にとっての自然資本、自然資本マネジメントのあるべき姿
 - 自然資本のマネジメントの捉え方については、その人自身の捉え方（職業人として、あるいは住民としてなど、同じ人格でも時と場合によって異なる可能性）によって左右されるため、どういった観点からの意見であるかを意識して議論することが必要である。
 - 自然資本のあるべき姿と、自然資本マネジメントのあるべき姿とは、概念として切り分けて考える必要がある。
 - 自然資本は一様ではなく、地域に閉じられたもの、連関するもの、地域から切り離して議論するものが存在する。また分野により、マネジメントのアプローチや現状関わっているステークホルダーも異なっている。
 - 自然資本のマネジメントについては、自然資本がもたらすものとして、必ずしも道具的な価値だけでなく、関係価値（地域への愛着等）も存在することを考慮していく必要がある。
 - 自然資本マネジメントについて、行政、民間、またはその双方のハイブリッドによる主体が実践に携わる可能性が考えられる。そのため、マーケットとの接続や経済活動へのビルドインが必要である。
 - 自然資本マネジメントが、Well-beingにどう寄与するかが重要である。国際的な流れを受けたトップダウンのみではなく、ボトムアップにより、生活者も含めた多様な主体が、価値を見出す工夫が必要である。
 - 自然資本マネジメントには、対象とする自然資本の「分野」の壁や、都市・農村、上流・下流といった「空間」的な壁、また現在・将来といった「時間」の壁を超えたマネジメントの姿を目指すことが必要である。
 - 実際の自然資本マネジメントにおいては、自然資本がもたらすものが、現状維持でよいのか、増大させていくのかという管理水準の設定が議論になる。また、そもそも、ある自然資本を本当に

管理（マネジメント）する必要があるのかも論点となりうる。

- 自然資本のマネジメントについて、地域に根差した合意形成を行った結果、全体の最適解とズレが生じているケースもある。全体最適と部分最適を如何に調整しすり合わせるかが課題となる。
2. あるべき姿を実現するための多様な主体の参画
- 多様な主体の範囲として、自然資本の管理者・サービス提供者と受益者が入っている必要がある。
 - 人口の偏在が問題の1つであり、大都市住民の参画を促すなど、農村の地域住民だけではなく、多様な関係者が自然資本のマネジメントに自発的に参画する仕組みを模索する必要がある。
 - 将来世代の利害を考慮する際には、将来的な人口減少や技術進歩といった将来の視点も取り入れて地域のあり方を検討するFutureDesign手法も活用可能性がある。
 - 資金や知見の保有者、地域住民などを巻き込むことが必要だが、参加を促す前提として、自然資本マネジメントに関して生じている便益や負担の構造を明らかにする必要がある。
 - 参画主体間に情報格差が生じることがある。ネガティブな情報も共有することや、信頼関係を築くことも重要である。「ともに苦しむ」といった価値観や、利他の精神も求められる。
 - 多様な主体が自然資本マネジメントに参加する権利の正当性、マネジメントの担い手に問われる参加の責任などを考慮に入れて議論する必要がある。
3. あるべき姿を実現するためのデジタル化（DX）
- デジタル活用に向けては、単に紙をデジタルに置き換えるといった取組のみに止まらず、自然資本マネジメントの取組自体を構造的に捉えなおすことが必要である。
 - デジタル化のメリットとして、効率化・標準化や生産性向上が期待される。また、より多くのデータがつながることで相互関係・利害関係を可視化することや、時間・空間のギャップを超えた可視化といった役割も期待される。
 - 自然資本は複雑系であり、まだ十分に測定・解明ができない点も多いほか、評価に用いる指標も多様である。人々の志向の変化など将来の不確実性もあることから、こうした点をデジタルの限界と捉え、謙虚さを意識した活用が求められる。
 - 新たな社会的な試みを実践するにあたり、一定のトライ＆エラーを受容する社会制度やカルチャー、ベースとなる利他的な志向も必要と考えられる。

以上